東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

【養育院本院】碑について

東京都健康長寿医療センターは、『養育院』の流れを汲む組織であり、昭和61年までは『養育院附属病院』、以後平成21年までは『老人医療センター』と称しました。平成21年4月からは、地方独立行政法人・東京都健康長寿医療センターとなりました。平成25年3月、新施設開設に先立って、敷地内の渋沢榮一銅像の前に、『養育院本院』碑が建てられました。元職員を中心とする、『養育院を語り継ぐ会』によるもので、重量1.98トンの御影石の石碑です。碑の題字には、養育院の維持・発展に50年以上も尽くした、社会事業にも熱心な日本経済の父・渋沢栄一の墨跡を用いました。養育院の原資となった七分積金制度を作った松平定信の心願書と、彼をたたえる渋沢栄一の書が、旧養育院長室に掲げてありましたが、そこからとったものです。はめ込んである金属板の碑文に『養育院』のいわれが書いてあります。

養育院本院の碑　碑文

養育院は、明治五（千八百七十二）年十月十五日に創設された。維新後急増した窮民を収容保護するため、東京府知事大久保一翁（忠寛）の諮問に対する営繕会議所の答申「救貧三策」の一策として設置されたものである。この背景には、ロシア皇子の訪日もあった。事業開始の地は、本郷加賀藩邸跡（現東京大学）の空長屋であった。その後、養育院本院は上野（現東京芸大）、神田、本所、大塚など、東京市内を転々としたが、関東大震災後、現在地の板橋に移転した。養育院設置運営の原資は、営繕会議所の共有金（江戸幕府の松平定信により創設された七分積金が明治新政府に引き継がれたもの）である。

養育院の歴史は、渋沢栄一を抜きには語れない。営繕会議所は、共有金を管理し、養育院事業を含む各種の事業を行ったが、渋沢は明治七年から会議所の事業及び共有金の管理に携わり、養育院事業と関わるようになった。明治十二年には初代養育院長となり、その後亡くなるまで、五十有余年にわたり養育院長として事業の発展に力を尽くした。

養育院は、鰥寡孤独（かんかこどく）の者の収容保護から始め、日本の社会福祉・医療事業に大きな足跡を残した。特に第二次大戦後は、児童の保護や身寄りのない高齢者の養護、さらに高齢者の福祉・医療・研究、看護師の養成など時代の要請に応じて様々な事業を展開した。

平成十一年十二月、東京都議会において養育院廃止条例が可決され、百二十七年にわたる歴史の幕を閉じたが、養育院が行ってきた事業はかたちをかえて現在も引き継が

れている。

養育院に関連する碑は、ほかに養育院の物故者中、引取人のない遺骨を埋葬、回向をお願いした東京都台東区谷中の大雄寺、了俒寺、栃木県那須塩原市の妙雲寺及び東京都府中市の東京都多磨霊園にある。

なお、碑の「養育院本院」は渋沢栄一の墨蹟を刻んだものである。

平成二十五（二千十三）年　三月

養育院を語り継ぐ会

この碑は元養育院職員等の篤志によって建てられました。

地方独立行政法人　健康長寿医療センター

なお、『明治５年（1872）、ロシア皇太子の訪日に際し、市中を浮浪者が徘徊するのは文明国の恥と考え、時の治安維持責任者が、浮浪者を集めて収容した・・・』という説が流布しています。しかし、近年、大久保忠寛（のち隠居名・一翁）が、江戸幕府の“蛮書調所総裁”であった安政４年に、七分積金の様な財政基盤による大規模な西洋版小石川養生所の創設を提案（病幼院創立意見）していること、江戸開城の時、七分積金を明治政府に引き継いだ責任者が大久保一翁であること、かれが東京府知事になったとき、救貧策を諮問し、その答申の一つとして養育院が作られたことが明らかにされています。また、ロシア皇太子とあるのも、ロシア皇帝の３男に当たる人で、皇太子ではなく、後に日露戦争時のロシア海軍の最高責任者アレクセイであったことが明らかにされています。